

阿部武司
[大阪大学大学院経済学研究科長・同研究科教授]

磯辺行久
[アーティスト]

伊東信宏
[大阪大学大学院文学研究科准教授]

オウ・ニン/ 欧寧
[編集者、アートディレクター]

大谷 煥
[DANCE BOX Executive Director]

尾田栄章
[国連・水と衛生に関する諮問委員会委員]

北川フラム
[水都大阪2009プロデューサー]

金水 敏
[大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長
/同大学院文学研究科教授]

小浦久子
[大阪大学大学院工学研究科准教授]

下條真司
[大阪大学サイバーメディアセンター教授
/情報通信研究機構 首席研究員]

ハーヴィ・シャピロ
[大阪芸術大学環境デザイン学科教授]

ジェフリー・Eヘインズ
[オレゴン大学アジア太平洋研究センター長]

椿 昇
[アーティスト]

永田 靖
[大阪大学大学院文学研究科教授]

橋爪節也
[大阪大学総合学術博物館教授]

平川秀幸
[大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授]

平田オリザ
[劇作家/大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授]

平松邦夫
[水都大阪2009 実行委員会会長/大阪市長]

福田知弘
[大阪大学大学院工学研究科准教授]

松本雄吉
[劇団維新派主宰]

水内俊雄
[大阪市立大学都市研究プラザ教授]

ヤノベケンジ
[アーティスト]

吉見俊哉
[東京大学大学院情報学環教授]

鷺田清一
[大阪大学総長]

遊びをせんとや 生まれけむとや

水都大阪の再生

水都大阪2009記念シンポジウム 記録集



水都大阪2009記念シンポジウム

「遊びをせんとや生まれむ——水都大阪の再生」

プログラム

10:00-10:15 開会あいさつ

平松邦夫

(水都大阪2009実行委員会会長/大阪市長)

10:15-10:45 基調講演

鷺田清一 (大阪大学総長)

10:45-11:00 問題提起

吉見俊哉 (東京大学大学院情報学環教授)

11:00-12:30 ◎セッションⅠ 「河港・大阪と市民社会」

人・モノ・情報の集結地として発展してきた水都・大阪の歴史と現在を、市民社会・アジアへ繋がる港湾都市・環境都市、といった様々な視点から紐解き、大阪の地政学的ポテンシャルと水都再生への道筋を探る。

第1部：大阪を歴史的視点から考える

*プレゼンテーション [1]

ジェフリー・ヘインズ

(オレゴン大学アジア太平洋研究センター長)

*プレゼンテーション [2]

橋爪節也 (大阪大学総合学術博物館教授)

*プレゼンテーション [3]

水内俊雄 (大阪市立大学都市研究プラザ教授)

*ディスカッション

——コーディネーター：金水敏

(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長)

12:30-13:30 昼食休憩

13:30-15:00

第2部：大阪を水・環境の視点から考える

*プレゼンテーション [1]

ハーヴィ・シャピロ (大阪芸術大学環境計画学科教授)

*プレゼンテーション [2]

磯辺行久 (アーティスト)

*プレゼンテーション [3]

尾田栄章 (国連・水と衛生に関する諮問委員会委員)

*ディスカッション

——コーディネーター：金水敏

15:00-15:15 コーヒーブレイク

15:15-17:15 ◎セッションⅡ

「大阪の市民力・文化力ーアートが都市をかきまぜる！」

文化、アートの現場で活躍する実践者（アーティスト）を国内外から迎え、大阪の市民力・文化力アップにアートが果たす役割を討議。水都大阪2009の意義を問いかける。

*プレゼンテーション [1]

椿昇 (アーティスト)

*プレゼンテーション [2]

ヤノベケンジ (アーティスト)

*プレゼンテーション [3]

松本雄吉 (劇団維新派主宰)

*プレゼンテーション [4]

オウ・ニン/欧寧 (邵忠基金会ディレクター、編集者、アートディレクター)

*ディスカッション

——コーディネーター：平田オリザ (劇作家 /

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授)

17:15-17:25 総括講演

鷺田清一

17:25-17:30 閉会あいさつ

北川フラム (水都大阪2009プロデューサー)

17:45-18:15 パフォーマンス

Dance Box 企画 「G U Y S・水都大阪編」

シンポジウム風ダンス

～踊れ！熱い男の水掛け論～

出演：ヤザキタケシ、村上和司、垣尾 優、竹ち代穂也、吾妻 琳、中西 朔、阿比留修一、内山 大、高見智征、中村一規、藤井 雅、石田陽介、塚原悠也

18:30-19:30 交流会

〔セッションI—第1部〕

「大阪を歴史的視点から考える」

プレゼンテーション [3]

水内俊雄

(大阪市立大学

都市研究プラザ教授)

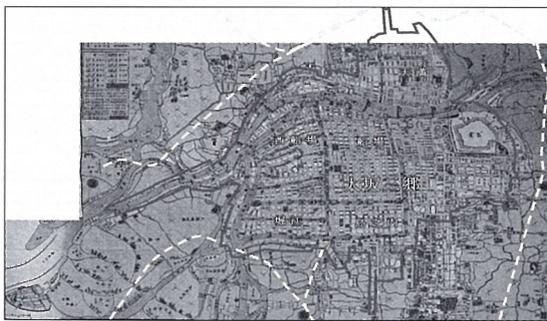
引き続き、大阪市の関係者で、大阪市立大学から来ています水内です。市長の前で何ですが、今大阪市立大学も府立大学も、いろんな意味で存亡の危機にございます。吉見さんも、21世紀の大学の在り方のお話をされていましたが、逆に考えると大学危機の最先端を走っているのかなとも思っています。

その中で、大阪市立大学も公立大学法人として、かたちの上では独立した大学になったわけですが、その目玉、都市研究の拠点となる全学の組織として、「都市研究プラザ」がつけられました。実は今お話しになられた橋爪さんの弟さんとペアで、私はこの組織を立ち上げたんですが、市長選挙に出られまして平松市長ということになったわけでございまして、しばらくひとり専任という形になっていました。

橋爪さんはこの船場や島之内の担当でしたが、私はその外側の環状線エリア担当でした。水都を取り巻く環状線エリアの大阪という、もうひとつの考察の軸があると思いますが、そこから見て、より豊かに大阪のイメージを再構築してみたいと思います。

江戸時代の大阪は、まさしく環状線の周りにスポッと納まるかたちでした。「水都」というひとつの理由は、土地が低いこと。今でも大阪市の梅田あたりは海拔ゼロメートル以下ですから、ほとんど海に沈んだ都市だと言えます。そういう意味では海都、海の都と書いてもいいくらいですが、基本的には網の目のように張り巡らされた川と港を基点に河港都市大阪をつくってきたのではないかと思います。

歴史的都市コア
(枠内)



次に、同じ地図ですが、違う情報を書くと、環状線梅田、難波、天王寺の位置とこの構造を押さえていただきたい。

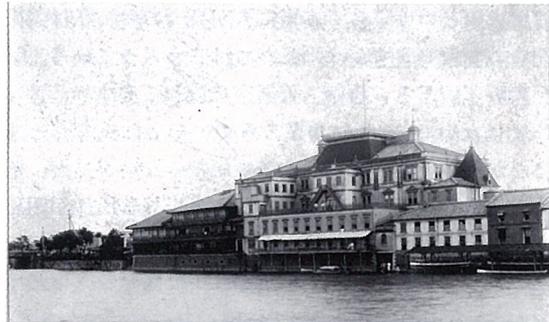
現在の大阪が「水都」とイメージされるのは、この時期の大阪からきていると思います。実はこの後に大阪は非常に発展していく。明治36年の公会堂からの鳥瞰写真です。今では、



上田貞次郎写真コレクションとしてプラザのウェブでも紹介しています。人の顔まではっきり見えるすごい写真です。

注目すべきは、やはり水辺に顔を向けている都市であるということ。建物の顔、表面がやはり水辺を意識しています。本当にゆったりと、情緒あるまちとして存在しています。

これは船場のほうか島之内の方の姿で、河岸そのものですね。階段状に降りていく水辺空間がきれいに撮影されています。これは今の東洋美術博物館、公会堂の横にある大阪ホテル、ここを拡大してみると、「ここはベニスか?」と思うほどのかわい風があるわけです。これは中之島、先ほど橋爪さんがおっしゃいましたが、本当に近代都市景観のショールームみたいなところですよ。明治36年にはこういう風景でした。



明治三六年中之島の写真
大阪ホテル 大阪市大都市研究プラザ管理

吉見さんが、先ほど瀬戸内海のお話をされていましたが、瀬戸内海というのは大運河ですね。大運河の行き着く先が、この川口の外国人居留地というところで、ここに安治川という川があって、大阪の水運の生命線を活用するはずでした。しかし当時は新淀川がなかったものですから、土砂がたまって、川口居留地もすたれて、その後神戸に港湾機能が移ってしまったそうです。明治初期の頃と現在のイメージと比べると、かなりドラスティックに違う景観が見られます。

淀川が伏見京都の伏見港から、八軒家までをつないでいた。その意味では、水運における非常に重要な最終地点の八軒家の写真です。八軒家からまた水の道が延びて、大阪市にいろんなものを運んで行く拠点だったわけです。そこに外輪船が、京都の伏見港から通っていた。

これは鉄道、市電ができる以前の写真ですので、明治の時代までは、水、水面というのは縦横無尽に使われていた道なのでないかというイメージを持っています。

さて、今度は1908年の大阪の地図ですが、江戸時代の市域の周りに、工業都市大阪が生まれてきます。「東洋のマンチェスター」と言われています。これをどうとらえるかというときに、「煙の都」という言う方もありますが、この命名にもうひとひねり加えてみます。

それは、「東洋のシカゴ」。勝手に名付けてしまいました。先ほど吉見さんも、移民がいっぱい来たと言っていました、要するにマルチエスニックなんですね。朝鮮半島から来た人の分布と、沖縄から来た人の分布を示すと、すごく多い。昭和15年、19年には41万人の日本人以外の人が住んでいた。人口の15%が、いわゆる朝鮮半島から来ていて、移民も含めると8割ぐらい。移民の都市とも言える。もうちょっと「移民の都市」という言い方を使ってもいいのではないかと思うぐらいです。いわゆる「商都大阪」とはまったく違う、「移民都大阪」というぐらいの言い方も導入すべきなのではないか。

一方、「商都大阪」を支えるものとして、大阪では数少ない「小市民的」という当時の言い方を使うと、サラリーマン階層というものが上町台地に分布していて、今の阿倍野区、天王寺区は、その受け皿として郊外を支えていた。

こういう多様なまちになりましたので、関一というグレートメイヤーのプライドとして、自分たちの政策を大大阪としてのプライドを持って進めようとした。要するに中央政府ではなく、都市政府が全部やってしまおう、そういう伝統が始まります。

例えば貧困に関しても、真ん中にはないけど、周辺部にはある。これは社会政策のさまざまな関連施設の分布を示した図ですが、極めてたくさんの、今でいう福祉政策を打ち出すことになります。

それからもちろん御堂筋。戦前の都市計画図を見ると、御堂筋をつくり、中央線や谷町線などがいっぱい計画されていますが、「大大阪」をつくり、その中心を御堂筋にしているという強い意図が見られます。

勢い余って、大阪商科大学という私たちの大学の前身までつくっていただいている。実は大阪帝国大学より3年古い創立の大学です。大正8年から、「つくって、つくって」と文科省に言っていたわけですが、結局「もう自分でつくる」とつくってしまった大学が大阪商科大学なんです。そういう意味で、やっぱり「大大阪」のプライドっていうのは、関西ローカルを突き抜けて中央まで行っていたのではないかという感じがします。

ところが、先ほどジェフリー・ヘインズさんも言うておられました、戦争のダメージがかなり大きい。これは戦災の図を見ると、真ん中の部分がほとんどダメージをくらっているのがわかります。港湾部もほとんどやられてしまいます。周りがちょっと残ってしまうところが、逆に大阪の戦後の住環境で問題を生じさせるわけですが、戦争で大阪の都市構図は本当に破壊されてしまいます。

次は昭和17年、朝潮橋から大阪港、天保山を撮った空中写真を見ると、みごとに長屋が密集している姿が見えます。一方、昭和25年の空中写真では、全部焼けた後、簡易住宅というバラックを建てていく。まったく違うまちづくりが始まってゆきます。

ここで大阪のつくる都市、土建国家大阪市というものが登場しまして、川の底から、海の底から土を取って埋めて、地下鉄を掘るという土建体制が始まっていきます。多分ここで水都も、同じように犠牲になって、その流れの中でなくなっていくことになります。

ジェーン台風で半年間浸かったままの写真ですが、港区、此花区、大正区だったと思います。「もうこれはいかん」と、盛り土作業で、建物を3メートル上に上げていくという作業を一生懸命やった。もし港区とか大正区の方おられたら、「つい最近までこの事業をしてたんよ」とおっしゃるでしょう。換地整理の終了がつい数年前だったと思います。40～50年かけて盛り土をするというすごい事業でした。逆に、水都といわれてきた大阪のネガティブな側面との戦いだったと思います。



港湾部の水都の苦難
前代未聞の盛り土事業

このように盛り土地帯というのが、港湾部にありまして、大阪ドームに行かれた方もおられると思いますが、あそこは海拔以下です。大正駅というのは、マイナス1メートルですが、弁天町の駅は海拔1.5メートル。なぜかという、盛り土をして土地を上げるというすごい努力をしてきたからです。そして新しい大阪内港を造っていくのですが、その後すぐ大阪南港などが登場してくるので、せっかくなかったこの港湾機能がうまく生かされなくなった。それをかろうじて使ったのが天保山です。

戦後も、大阪はやはり住宅問題が激しいのですが、戦争で焼けてしまっても、また不良住宅が周りに張り付いていくという状況が登場してきます。「とりあえずは仮設住宅を造ろう」という話になっていきますが、このような水都を違うふうに見ると、すごい状況になるんですね。水面のラインに2階部分が見えているというような状況。これは大正区の写真です。水面の上に見えているのは2階です。この1階は水面ですから、これとどう闘っていくか。



港湾部の水都の苦難
居住貧困は継続

ここに大土木事業とあって、港区、大正区、みんな大阪の港湾局が水面をお持ちですので、港湾局が一生懸命やってい

く。市が港を持っているというのも珍しいですが、これも「自分でやる」と言って、港まで自分で整備してしまうというのはすごい。大阪市は何でもやってしまうんですね。

問題はその後、インナーシティ問題が発現して工場がなくなっていくこと。そして、木造密集住宅が残っていくという1970年代の問題を抱えていきます。その問題を再開発で解決しようとするんですが、バブルになった90年代に、大阪の21世紀の計画として初めて海辺を使うという発想が出てきて、湾岸に着目していきます。大阪城公園、または鶴見緑地など、東西の軸を造っていく。今まで千里ニュータウンの南北の軸が強かったんですが、初めて東西に伸びる湾岸軸を入れていくことになって、「これで大阪は21世紀に向けて発進できる」というわけで、WTCとかATCというのができていきます。

ところがこの同じ時期に、市大が当時の磯村市長から、ホームレス、野宿生活者の問題にかかわるよう言われ、1998年に1カ月かけて大阪市の野宿者の生活者の調査をしたんです。すると、都心部に貧困現象が出ていることがわかるわけです。大阪城公園、長居公園だけでなく、中之島も真っ黒になっています。あるいは毛馬、桜ノ宮、今回の水都大阪2009の場面である各地は、全部野宿者に、テントに埋め尽くされるという状況がありました。

「これじゃいかん」というわけで、私はストリートペーパーを作って、『なにわ路情』という名前を付けて、中之島公園や毛馬、桜ノ宮で、野宿生活を送っている人に新聞を配った。300人か400人ぐらいおられました。これは配布地域のエリア図です。今はほとんどもうおられませんけど、水都大阪のもうひとつの側面が出現した時期でした。

最後にこちらは、東京と大阪の、いわゆる専門的プロフェッショナルな職業に就く人の分布を示している図ですが、東京23区には、そういう方が本当にたくさん住んでおられます。都心の山手線の内部にもたくさん住んでおられます。

これを大阪市域で見ると、ほとんど真っ白になっちゃうんですね。北摂・千里とか阪神間、近鉄奈良線沿線、泉北ニュータウン辺りに住んでいる。おそらく大阪市域というのは、1930年代のモダン都市の最盛期のエリアであり、21世紀のポスト・インダストリアルシティというか、脱工業化、あるいはポスト・モダンと言ってもいいかもしれないけれど、この市域の間尺がちょっと合っていないのではないかと思います。



首都圏・東京と京阪神都市圏、大阪の都市構造の決定的違い。左—東京、右—大阪

橋下知事がおられたら喜ぶかもしれませんが、必ずしも私、「道州制を採れ」、「大きなものをつくれ」とは言いません。香港やソウル、アジアの都市のグローバルシティの面積を見ると、大体大阪府ぐらいの面積なんですね。一方ヨーロッパはものすごくコンパクトな都市構えをしています。その分都市間連携が整っています。どちらがいいかというのはものすごく難しいのですが、この市域で果たして大阪市の将来の絵姿をといわれると、やはり僕は、その先行きにしんどいものを感じざるを得ません。

千里ニュータウンは、面白い「千里文化」というものをつくりました。あるいは阪急文化というのがありますが、何で宝塚は大阪弁で芝居をしないのかと考えると、不思議な空間です。

要するに大阪の人は、大阪人と言う場合、どこのお大阪人を指しているのかなど。阪神ファンも大阪、私は和歌山出身で、今岸和田に住んでいますけども、岸和田は大阪府で数少ない、殿様がいて藩領があったところなので、ここだけ面白いことに、やっぱりヒエラルキーを持っています。殿様がおつて、祭りも、殿様も含め全員が楽しめる「だんじり祭り」なわけです。堺もそうですが、大阪は構造がフラットですよ。しかも、小市民、中産階層の人が周りに住んでしまう。じゃ、どこが大阪か？ 移民都大阪で誰が大阪人か？

このシンポジウムは大阪大学さんの主催ですが、大阪大学のイメージって、ものすごくスマートな大学なんですよ。どちらかというと大阪市立大学のほうが泥臭い大学になっています。珍しいですよ、大阪のイメージと一番合わない大学は大阪大学です。ものすごくスマートで、理系の先端的なことをするのが大阪大学。千里文化、阪急文化をもっときちんと語ったら、「大阪は何や」ということが、もっと豊かに言えるのではないかと思います。

東京の場合は、自分のところに全部もっていて、吉見さんもお住まいですが、ど真ん中に住んでおられるので、東京一本で行けるんですけど、大阪はやっぱり京都や神戸を背景にしながら、「何が大阪人か」ということを考えたりする。これはおそらく大阪市民だけではないと思っています。

最後に、私のフィールドは、どうしても釜ヶ崎やあいりん地区、日雇い労働者街などが多いのですが、一番市民力が強かったのは、実はマイノリティ運動だったんですね。部落の人、日雇いの人、在日の人、沖縄の人、この人びとが発信をして市民力をつけていったのです。この都市構造を生かして、もっとひだのある議論をしないと、通り一遍の「粉もん文化論」に負けてしまうんじゃないかと思っています。

金水

歴史的な視点から、現在大阪が抱える非常にネガティブな問題を、とてもコンパクトにまとめていただきまして、大阪のイメージがさらに重層的につかめたと思います。住居地域の地図を見せていただいて、私自身も大阪出身と言いながら、西宮に住んで千里の丘の大阪大学に通っているという、自分の立ち位置をまざまざと見せつけられたような気が致しました。